

牛肉を食えずに若死にした 国木田独歩三十七歳の悲運

明治時代、牛肉は文明開化を象徴する食べ物だった。「牛肉食わぬは開けぬ奴」というわけで、当時の牛鍋屋はいまのハンバーガーチェーンなどとは比較にならぬ「翔んでる場所」だった。明治四年、千葉県銚子市に生まれ、いちはやく明治の気風をわがものとした国木田独歩は、明治三十四年「小天地」と題する雑誌に「牛肉と馬鈴薯じゃがいも」なるユニークな小説を発表、当時の庶民生活の理想を牛肉に象徴させて、いかにも詩人らしい超明治調の人生論を展開した。

この小説は、明治倶楽部と名乗るあるクラブの食堂で、常連たちが某夜、たまたま人生觀を語り合うという形になっていて、当夜の話題の中心となった岡本誠夫まことという青年は、あきらかに独歩の分身とわかる人物。小説としてはそれほどの名作とも思えないが、独歩が牛肉に明治の物質主義の象徴を見て、それを自作の題名にすえた慧眼はやはりしたたかなジャーナリストの目であった。

小説の中で、この世はうまい牛肉を食うことに徹して現実に生きるか、それともじやがいもで命をつないでも理想や主義に生き抜くべきかが、いかにも明治の書生っぽい生かじりの調子で語られるが、主人公の岡本が、最後に「自分は牛肉も馬鈴薯も超越して、

ミート de meet

フイヨン(スープストック、洋風だし)

深なべに牛肉と水を入れて火にかけます。煮立つにつれて浮き上がってくるアクと脂をすくってすてます。

弱火にして、野菜と香草の束と塩を入れ、再びときどきアクと脂をすくい、すてながら約2時間煮て布でこします。

この宇宙人生の不思議にひたすら驚きたい」といい出して、一同深い沈黙につき落とされる。独歩は明治二十八年、東京・日本橋の某病院長の娘信子と、同家との絶縁を条件に結婚を許されるが、アメリカで女性新聞の発行を夢みるような派手好みの女であった信子は、独歩との窮乏生活に耐えられず、半年後の明治二十九年四月、教会からの帰りにとつぜん失跡する。独歩にとっては理想も夢もふつとぶような足払いであった。

豆子の農家での独歩の新婚生活は、米五合とサツマイモを加えて、二人の一日分の食いぶちとするようなみじめなもので「豆の外に用ふべき野菜少なし。時々魚肉を用ふれども、二銭若しくは一銭七りんのあじ、めばる、さばの如き小魚二尾を許すのみ」と、逆立ちしても牛肉を口にできるような生活ではなかった。

が、彼は「粗食といふをやめよ。粗食は美食よりも人を弱くするの實、極めて少なきなり」と強がりを用いのである。そして明治四十一年、三十七歳の若さで咯血して死ぬ。「牛肉と馬鈴薯」は、まさに彼にとつての反面教師だったというべきか。